

# 琉球大学学術リポジトリ

日韓のコミュニケーションのキーワード — 「ケン  
チャナヨ」 —

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語:<br>出版者: 琉球大学教養部<br>公開日: 2009-12-15<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 兼本, 円, Kanemoto, Madoka<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/13929">http://hdl.handle.net/20.500.12000/13929</a>                         |

## 日韓コミュニケーションのキーワード ——「ケンチャナヨ」——

兼 本 円

### 1. 異文化とキーワード

異文化または自国の文化を理解しようとする際にいくつかのキーワードが利用されている。「異文化コミュニケーションキーワード」(1991)もその手法を取っている。それより以前にもアメリカでは「甘えの構造」の「甘え」は日本人の精神と文化を理解する為と同時に日米のコミュニケーションの為のキーワードとして紹介されている。日米間のコミュニケーションに関する論文にはこの「甘え」のキーワードは不可欠と言っても過言ではない。さらに中根千枝著の「縦社会の人間関係」で紹介された日本人の人間関係「縦」の概念はその著が英訳され“Japanese Society”として広い層に読まれているし、近頃では小説と映画共に日本叩きであるかないかの論議を呼んでいる“Rising Sun”の骨組みをなした参考文献としても挙げられている。一方日本では independence, individualism, egalitarianism, equality 等がアメリカ人の精神と文化を理解する為の道具となっている。このキーワードを用いる手段には賛否両論あるだろうが一つで文化全体を説明しようとするのではなく複数の概念との有機的関わりの中で深められればより良い異文化理解に役立つことに違いない。拙論では日本で「近くて遠い国」と呼ばれている韓国の文化に対して日本人が引合いに出す「ケンチャナヨ」(気にしないで)という言葉が如何に断片的に捉えられ日韓のコミュニケーションに誤解をもたらしているかを指摘して、その言葉がコミュニケーション的価値のある他の要因(人間関係、会話のはこび方、自己主張)とどのように有機的に関連しているかを考察する。

### 2. キーワードとしての「ケンチャナヨ」

韓国に旅した者、留学した者、また外国人としてその地に住み働いた者がこの言葉をどう評価しているか挙げてみよう。

韓国に留学経験のある日本人ジャーナリスト荒木は二三の体験例を「愛し哀しき韓国よ！」で挙げて「ケンチャナヨ」をこのように紹介している。「韓国人の大雑把さを表すのに『ケンチャナヨ文化』という人もいるようで、結構日本でも有名になった言葉です。しばらく前の話なので『今はそんなことない』と言われるかもしれませんが・・・。」韓国の大学で教鞭を取るフランス人ロジェ・ルベリエはこう語る。「韓国人は、よく『ケンチャナヨ』という言葉を連発する。・・・わたしはこの韓国人の口癖が楽観的な「適当主義」としか思えない。」両者が韓国とその文化を否定的に捉えているのではないことは著書に明かであるが「ケンチャナヨ」そのものは否定的に捉えられている。

在日韓国人作家つかこうへいは「娘に語る祖国」のなかで「ケンチャナヨ」を「なるようにしかならない」として韓国の庶民の文化の「おおらかさ」を「支えている言葉」として紹介し理解している。在韓期間の豊富なジャーナリスト黒田は韓国語のすすめの本に於ても「ケンチャナヨ」は些細なことにこだわらない、韓国人のおおらかさの一面の表れ、被害者への慰めと思いやりであると主張している。同じく韓国人女性を妻とする日本人ジャーナリスト平井もやはり「ケンチャナヨ」を韓国を理解するキーワードの一つに挙げてその意味を「いたわり」として捉えている。この三者は前者と対照的に「ケンチャナヨ」を肯定的に捉えている。しかし、一方ではどちらともいえない捉え方をする者もある。

日本で生まれ、日本、韓国、米国の三国で教育を受けたビジネスマン T. W. カンは「ケンチャナヨ」の辞書的意味を「それでよろしい」、「それで十分です」、もしくは「それならまあまあいいでしょう」と解説しているが、その意味を正確に翻訳することは非常に難しいと述べている。さらに相手に対しての寛容と評価をしめす意味でも使われながらも、緻密な計画より行動を優先する楽観主義の現れだとも説明している。

以上で「ケンチャナヨ」が日本人の間で韓国文化の理解の為のキーワードとして挙げられていることとその解釈が三つのグループに分けられることが分かる。第一に、否定的意味に捉えられること、例えばいい加減さとして。第二に、肯定的に捕らえられている例、おおらかさとして。第三に、否定にあらず肯定

にあらずという不可解な意味として。第一のとえらかたが顕著であることは次の金永熙の例から推して知るべしである。彼は日本人が「ケンチャナヨ」を韓国人とその文化のキーワードとして強調しすぎるとし、本来の「ケンチャナヨ」の使われる状況を幾つか挙げている。

「今日お返しする約束だったけど、まだ・・・」

「ケンチャナ」

「うっかりして花瓶を割ってしまったの・・・」

「ケンチャナ」

満員電車で間違っって足をふんだ。

「痛っ！」

「ミアン・ハムニダ（すみません）」

「ケンチャナヨ」

韓国人である著者が述べたいのは「ケンチャヨ」の本来の意味は許すことであって日本人が強調する責任のがれではない、ということであろう。しかし、肯定的な側面だけを文化の全貌としか認めない見方は否定的側面を「例外」と見なし一旦排除するが、その例外の蓄積が逆に普遍的なものに早変わりさせることをもはらんでいる。正しくは、一文化の否定的側面も肯定的側面も文化のダイナミズムとして捉えるべきであろう。次に何故これほどまでに「ケンチャナヨ」の解釈が落ち着かないのか辞書を概観してみる。この表現の持つ意味的特徴がその原因なのか検討する為である。

### 3. 辞書の定義

多くの者が言葉の意味の拠り所とする物として辞書が挙げられる。母国語においても文脈から問題にする言葉の意味が察せられる時ですら辞書を一旦調べないと安心できないというのが多くの経験である。外国語ともなると辞書の占める心理的重要さが何倍にも増すことであろう。外国語学習の初期には辞書の意味を部分的に暗記して会話におけるその語の意味にもそれを押し付ける嫌いがある。その様なことがここでも起こりえないか先ず辞書を概観し、それから間接的ではあるが小説と随筆から文脈のある場面を抜き出し検討する。

韓日辞典「朝鮮語辞典」(小学館)に依れば動詞「ケンチャンタ」は大丈夫だ、構わない 1. 悪くない、結構だ、なかなかいい 2. 間に合う、十分だ 3. 構わない、大丈夫だ、心配ない 4. 婉曲に断わる語: 結構だ。しかし、日韓辞典「現代日韓辞典」を逆引きしても「ケンチャナヨ」にはたどれない。韓英辞典 *Donng-As Prime Koean-English Dictionary* (東亜出版)によれば 1(be) passable; be not bad; nice; good; fair 2(be) permissible; do not mind; make no difference; be all right 3(be) safe; secure; be free from danger; be all right; be O.K. ここでは韓日辞典と一緒にある。同じく念のため英韓・韓英辞典 *Hippocrene Practical Dictionary: Korean-English English-Korean Dictionary* の英韓の部を逆に調べても元に戻ることは出来ない。しかし、日韓と英韓辞典で意味を調べることは難しい様だが、現実にはくだんのカンがうったえる様な難解な言葉だとは思われていない。さて、はたしてこの辞書の意味を把握した異文化の者である日本人が韓国人との実際の会話で「ケンチャナヨ」を正しく捉えているだろうか。

#### 4. 小説と随筆に見る意味

小説「仮面海峡」の韓国人女性順子と日本人男性正明のくだりである。

「ケンチャナヨ」

大声でいった。

「大丈夫よ。追い返したよ。もうこの家にも会社にも、あの娘たち、こないね」

玄関に立ち上がった順子は、自信に満ち満ちている。

「私、アイパさん、守る。この家とアイパ精機守る。ケンチャナヨ」

「ケンチャナヨ」とは「気にするな」という意味であるらしい、と正明はおもった。

ここの「ケンチャナヨ」は文脈から推し量れる通り「気にしないで」が妥当である。辞書の「構わない」でもおかしくない。しかし、関川の体験的小説「東京からきたナグネ」ではどうだろう。

「・・・そう考えてわたしは真露のびんに手を伸ばしかけた。おたがい酔いがまわったか金美淑の腕となんとなく交錯した。彼女の手がびんに触れ、

倒れた。半分近く残っていたびんの中身が卓上にとくとくと流れ、やがて茫然と見まもるわたしの膝にもこぼれ落ちてきた。あーあ、と彼女はいった。わたしも、あーあ、と声をあげた。ごめんなさい、とは彼女はいわなかった。ケンチャナヨ、といった。」

ここではくだんの例の通りの「気にしないで」も「構わないで」の訳も無理である。著者が期待する「ごめんなさい」は日本人にとっては無理からぬことだ。次の例は筒井の韓国留学中の経験である。店員と客の関係であるがどうだろう。

「リーボックの売り場はすぐに見つかったが、お姉さんが手紙で指定してきた『黒いリーボック』は見あたらない。そばにいた女店員に彼女が聞いている。「ちょっと聞きたいんですけど、このサイズで黒はないんですか？」女店員はニコリともせず、「ありません。」と答える。「黒がほしいんですけどね・・・。在庫もないんですか？」ふたたびニコリともせず、「ありません。」「ほんとうに？ちょっと調べてきてくれませんか？」店員、薄笑いを浮かべながら、「今は夏ですよ。夏には黒は作りません。これ、どうですか？可愛いじゃないですか？」「これわピンクでしょ！私が欲しいのは黒なのよ。」「ケンチャナヨ」

ここで店員が最後の言葉を「気にしないで」とか「構わないで」の意味で言い切ったと解釈できないこともないが、それは先に挙げた「いいかげんさ」で代表される否定的な解釈だけを生む結果にしかならない。しかし、辞書の共時的意味で解決できないのならば通時的意味からの解釈の試みはどうだろうか。日本の文化に造詣の深いイーオリョンは自国の韓国文化を「韓国人の心」で分析しているが、その中で「ケンチャナヨ」（原型は「クァンゲ・ハジ・アニダ」（関係はしていない））は「チョァヨ」（よろしい）の代りに使われるようになった言葉だと説明している。その理由は政状不安定な韓国では何かに関係していることが政変がある度に不幸をもたらしたからだと説明している。しかし、この説明もやはり上記の「ケンチャナヨ」の意味を明かにはしてくれない。辞書の意味が拠り所にならないのならば「ケンチャナヨ」はどう解釈できるのか。二つの体験例に元づいて人間関係、会話のはこび方、自己主張の三つの概念を

用いて分析を進める。

## 5. 三つの視点からの分析

### 1. 人間関係

日本人ジャーナリスト黒田は作家関川に類似する例を出しながらも謝辞ではなく行動に注目している。「たとえば、韓国の喫茶店やレストランでウェートレスが粗相をして、コップの水を客のヒザにこぼしたり、飲み屋でホステスがビールをこぼして客のズボンにかかったりした際、彼女らは『ケンチャナヨ』といいながら拭いてくれます・・・。」ここでは粗相をした者が謝りはしないが肝腎な始末をしたことに注目している。寛容な態度だとも言えるし、何故同氏が「ケンチャナヨ」を「おおらかさ」と受け取ったのかが分かる。寛容な態度は寛容な者どうしで確められ育まれ易いからである。すなわち、親しい者どうしにおいてこそ寛容がルールとして成り立つのである。日本人が期待しがちな謝辞は韓国人にとって親しい関係を否定する信号とも受けとられることがある。日本で活躍する韓国人作家呉の例からそれが窺える。彼女は日本人を夫に持つ韓国人女性の次のような例を挙げている。日本人と結婚して間もない彼女は夫が彼女に「ありがとう」、「ごめんね」を連発することと、夫にプレゼントを貰い嬉しさばかり表現して「ありがとう」と言わないのをとがめられることに夫婦の危機を感じると報告している。親しき中での謝辞はお互いに心理的距離を置こうとする行為に受け取られがちならしい。夫婦の間と客と接客する者の間では親しさの度合こそ違いが同一線上の人間関係にあることは理解できる。先述の関川の二人の関係もまたこの関係の同一線上にあることに気づけば、「ケンチャナヨ」が理解できる。因みに日本人に馴染の「慇懃無礼」の考え方もこれと程遠くない。

以上、「ケンチャナヨ」の言葉が使われるには親しい人間の間であることと、その言葉が使われること自体が親しさを確かめ深め合う方法だと言えるであろう。この仮設は後の二つの概念との関連性で強補される。次に見る例は親しさの視点のみでは理解しがたい。

## 2. 会話のはこび方

「この“ケンチャナヨ”には韓国に慣れないころ、ずいぶんと悩まされた。喫茶店で『ブラックコーヒー』と念を押して頼んでも、ミルクコーヒーを持って来る。違うといっても平気な顔で、『ケンチャナヨ、ミルクコーヒもおいしいから飲みなさいよ』と行ってしまふ。決して謝らない。私はミルクがまったく駄目なので、また呼び寄せて『悪いけどブラックに替えて欲しい』とお願いすることになるが、これも『ケンチャナヨ』とすぐブラックコーヒを持って来る。それならはじめから取り替えればよきそうなものをといつも腹を立てていた。日本では“もう一步のことをしないと骨惜しみする”と嫌うが、屈託のない笑顔で入れ替えてくる態度にはそんなことは少しも気にしていないようだ。あるとき、ふと気がついて『ミルクが嫌いなのでブラックコーヒーにしてください』と注文してみた。するとどうだろう、間違いなく“ブラック”がくるではないか・・・。」

この例に於ても接客する者が客に謝らないということが共通しているが、それとは別に「ケンチャナヨ」が依頼を拒絶する言葉ではないことに気が付く。むしろ客と言葉のやりとりをもう一度可能にしている。実際、次の依頼に対して気持ち良く「ケンチャナヨ」で応じている。親しさを確認する為の言葉が依頼を拒絶するものではあってはならないので当然とも言えよう。しかし、会話のやり取りの回数が増えるということは客と接客する者との区別を融合させビジネスライクではない親しさを増すことを意味する。一見客の側から「出し惜しみ」に見える行為も相手の要求の最小限に應ずることで次に出てくる要求を満たすことを可能にしている。一度に客の要求を満たし、それを接客マナーだとする日本文化からはこの行為は接客行為の悪さとしか見えないであろうが、日本におけるコミュニケーションには客と接客する側は乖離されていて親しみが生じがたい（それが接客マナーを保たせているのかもしれない）。会話のはこび方が文化によって異なるとするならば「ケンチャナヨ」の文化は会話に従事する両者の発言回数の多い方をよしとするのであろう（この点はアメリカ人のコミュニケーションを思わせる）。この仮設も自己主張との関連を考えるとさらに信憑性を増す。



### 3. 自己主張

韓国人の自己主張の強さは自他共に認めるところである。韓国人と日本人両者がそれを指摘するケースは枚挙にいとまがない。日本の大学で教鞭を取る韓国人言語学者の渡辺は韓国人が「一言のことで千両の借金も返せる」という諺にどれほど忠実で自己主張が強いかを説明している。日韓問題の専門家林は Burnlunt(1982) の日米のコミュニケーションのスタイルの違いの研究を日韓のコミュニケーション問題に置き換えて考察し、韓国人とアメリカ人は韓国人と日本人より「うまが合う」であろうと結んでいる。韓国人とアメリカ人のコミュニケーションの型が類似するからとの理由である。当然そこでは両者の自己主張の強さにも注目している。ここで自己主張の持つ不可欠要素を考えてみる。それは会話における主張の継続である。一度で妥協することをよしとしないことである。それが可能になるコンテクストとは会話のやり取りの回数に楽しみを見いだす文化であろう。換言するならば、自己主張が自己主張と意識される文化ではなく会話のやり取りの賑やかさとして楽しまれる文化である。よって「ケンチャナヨ」はコミュニケーションを断絶する表現ではなく、逆に会話を楽しもうとする者どうしの暗号と考えられる。

### 6. まとめと課題

以上、「ケンチャナヨ」が如何に韓国人の人間関係、会話のはこび方、自己主張と有機的に関連しているかを考証した。既成の「ケンチャナヨ」の解釈はコミュニケーションに関わる要因との関連のないままに論じられていて韓国文化を断片的に捉えがちであった。冒頭に述べた様に、キーワードを用いての文化の理解は文化に内包される諸要素との有機的関連に於て深められなければならない。本論はこのキーワードをコミュニケーションの促進剤として捉えたが、これからの研究の継続によって他の韓国文化に見るコミュニケーション上の特徴との関連性を考えていきたい。例えば韓国儒教との関わりである。その試みは「コミュニケーション理論の東西比較」においてジュンとイーの二編の論文に見られるが、前者は日本人のコミュニケーションとの差異に重点を置いたものではないし、後者は公論（パブリックスピーキング）の観点から論じてい

る。儒教は身分を細分化し礼を重んずる教えと大雑把に解釈されているが、その厳しい礼のなかで「ケンチャナヨ」は階層の異なる者の間のコミュニケーションに一役荷っていると思われる。さらに、一般的に例外的なコミュニケーションとして思われがちな口論と儒教の関連も韓国人の普遍的なコミュニケーションパターンを考察する上で重要だと思われる。儒教が盛んであった台湾、中国、韓国では口論にも一つのパターンがあることを断片的な体験談で見聞するからである。

## 参考文献

- 荒木和博 1992 『愛し哀しき韓国よ!』 亜紀書房
- Barnlund, D. C. (1982) *Communicative styles of two cultures: Public and private self in Japan and the United States*. Tokyo. : Simul Press.
- 「朝鮮語辞典」 1993 小学館
- Crichton, M. (1992) *Rising sun*. New York. : Ballantine Books.
- 土井 健郎 1984 『甘えの構造』 弘文堂
- Dong- A' s Prime Korean-English Dictionary. (1981) Soeul, Korea. : Dong-A Publishing Co.
- イー・オリョン (著) 1990 裊康煥 (訳) 1990 『韓国人の心』 学生社
- イー・サン・ヒー 「[補論] 儒教的視角からみた公論」 『コミュニケーション理論の東西比較』 日本評論社 1990 所収
- 深田 祐介 1991 『仮面海峡』 文芸春秋
- 古田暁 (監修) 1991 『異文化コミュニケーション・キーワード』 有斐閣双書 「現代日韓辞典」 (1991) 高麗書林
- 林 建彦 1982 『近い国ほど、ゆがんで見える』 サイマル出版会
- 平井久志 1993 『ソウル打令：反日と嫌韓の谷間で』 徳間書店

- ジューン・オスク・ユム「韓国哲学とコミュニケーション理論」『コミュニケーション理論の東西比較』日本評論社 1990 所収
- 金永 熙 1988 『韓国ノ悲劇・日本人の誤解』新森書房
- Korean/English English/Korean Dictionary. (1992) New York, NY.: Hippocrene Books, Inc.
- 黒田勝弘 1985 『ハンゲルはむずかしくない』ネスコ  
1991 『韓国人の発想』徳間書店
- 長澤 洋 1992 『びっくりのんびり韓国暮らし』草思社
- 中根千枝 (1967) 『タテ社会の人間関係』講談社  
Nakane Chie (1973) Japanese society. Tokyo: Charles E. Tuttle Co.
- 呉善 花 1992 『続スカートの風』三光社
- ルベリエ・ロジェ 1991 『日本人はなぜ韓国人を理解できないのか』光文社
- 関川夏央 1987 『東京からきたネグネ』筑摩書房
- つかこうへい 1992 『娘に語る祖国』光文社
- 筒井真樹子 1991 「ソウルのチョッパリ」亜紀書房
- T. W. カン 1992 『韓国--日本を越えられるか』TBSブリタニカ
- 渡辺吉鎔 1986 『はじめての朝鮮語』講談社

## Summary

### *Kenchanayo* as a Key Word for Understanding Korean Culture and Communication

Madoka Kanemoto

The meaning of the expression *kenchanayo* ( Don't worry ) has been claimed to reflect Korean culture and communication by those who are acquainted with Koreans. Their opinions are mostly based on a knowledge of Japanese culture and communication, which unfortunately merely led to further misunderstanding of the target Korean culture. This paper examines Korean culture and communication on its own right in the following aspects: (1) Korean styles of interaction among friends, (2) Korean way of advancing enjoyable conversation, and (3) Korean assertiveness. As a result, the following non-ethnocentric appraisals of Korean communication were made:

When *kenchanayo* is uttered instead of giving an apology or expressing gratitude, it was found to be a reflection of (1). Korean friends often skip uttering apologies or gratitude, whereas Japanese generally would not. When uttering *kenchanayo* was only thought as a reluctance of catering towards one's needs, it was found to be a result of the interaction of (2) and (3). For example, responding to requests gradually instead of at once, can promote multiple turn taking between restaurant workers and their *customers* ; such frequent turn taking between the two parties creates a ground to appreciate and enjoy assertiveness in daily interaction. If this analysis is correct, one should not be offended by *kenchanayo*, but welcome it as an invitation to further communication.